

徳は孤ならず

上 廣 榮 治

週日は代表会友一万一千名が参集し、内閣総理大臣はじめ各界の来賓を迎えて、会創設五十五周年の大節を見事に飾ることができました。それもこれも代表会友を送り出し、地元で普及実践に邁進された方々や式典準備に日夜汗を流された方々の熱い思いとご精進の賜物と心から感謝申し上げる次第です。

さて、宴は終わり、同志たちはそれぞれの実践場裡へと散って行きました。そんな皆様方にお贈りしたい言葉があります。「徳は孤ならず」という言葉です。この言葉は「論語」(里仁第四)では、「子曰く、徳は孤ならず、必ず隣あり」となっています。倫理的な生き方が孤独であるということはない。同志がきつと近くにいるはずだ、という意味です。確かに営々として徳義に生きる人は、孤独な生き方を強いられるかもしれませんが。しかし実は、すべての人の心に通じる大道を生きているのです。いつかは、その生き方が正しいのだと誰もが納得し、行を共にするようになるに違いないのです。

春先、私はたまたま「徳は孤ならず」を深く実感する機会に恵まれました。上智大学学長のウイリアム・カリー氏が卒業式で行なった「国際社会でリーダーシップをとれる人間に」と題する記念講演が掲載された同大学の新聞をいただいたのです。そして、その内容が日頃のわが会の主張と、本質的なところ

ろでまったく同じであることに驚いたのです。そして「徳は孤ならず、必ず隣あり」ということを、皆さんにも知っていただき、意を強くしていただきたいと思つたのです。以下はその講演の要旨です。

カリー氏はまず、リーダーシップをとる人の個人的な条件を四つあげています。

①自分がどんな人間かよくわかつている人。つまり、自分の長所短所を知っていて、虚飾や虚偽に流されず、人の考えに振り回されない人でなければなりません。

②夢を持っている人。人生の目標を達成する希望を持ち、実践できる人でなければなりません。

③自分で問題を解決できる人。

④個性的な人。つまり、③と④は自立した人です。

すなわち、リーダーとなる人の条件とは、しっかりとした自分を持ち、自分の判断で正しいと信ずることを実践できる大地に足のついた人、自立した人間でなければならぬということなのです。

この条件は、「朝の誓」を実践する人には、容易にクリアできるものばかりです。正しく美しく生きようという夢を持ち、人の悪を言わず己の善を語らず、腹を立てず、働く喜び、自分の足でしっかりと大地を踏みしめて、日々を新たに生き貫く。そんな人がリーダーなのです。

さて、この条件を満たした人が、努力しなければならぬ三つの目標があると、カリー氏は言います。⑤リーダーはコミュニケーションが上手でなければならぬ。つまり、人と話し合い理解し合うためには、相手の話をよく聞き、理解することが大切です。相手の言葉に腹を立てたり、相手が何を望んでいるかをわかろうとしない人には、コミュニケーションを成り立たせることはできません。

⑥話し合いは「和」を目指して行なわれるべきものだ。カリー氏が四十年前に来日したとき、日本人の強い集団意識、己を捨てて「和」を大切にす精神に感動したといっています。自分のことばかりを考え

て他や全体を省みない自分勝手主義は、リーダーにはあつてはならないことなのです。

⑦自分の行動に責任をとること。つまり、真のリーダーとは失敗したときに、それを素直に認めて責任をもって改善すべく努力できる人でなければなりません。

相手の話を聞き、理解し、常に愛和を心掛ける。そして責任ある行動をし、過ちを正すことに躊躇ちゆうちゆうしない。この要件に日々邁進できる人こそが真のリーダーなのです。しかし、「国際社会で」リーダーシップをとるためには、さらに必要なことがあるとして、カリー氏は次の三点をあげています。

⑧倫理感覚、道徳意識をもつこと。つまり、二十一世紀のグローバルな社会で、正しい経済秩序や社会秩序のために尽くす人には、公正な倫理感覚が不可欠です。

⑨現実主義者であること。つまり、原理原則に囚われることなく、現実を客観的にあるがままに捉えること。すなわち、わが会のいう「現実大肯定」です。

⑩リーダーは本当の国際感覚を持つこと。つまり、開かれた心を持って他者や異文化を受け入れること。私たちはみんな一つの「人類家族」であるという意識を持つこと。それが、国際関係を深めるための根本的な姿勢だと言うのです。

いかがでしょうか。すべて折に触れて、さまざまな角度から皆様方に申し上げてきたことばかりではありませんか。個人の問題、家庭の問題、社会の問題、そして国際問題にいたるまで、およそありとあらゆる問題は、倫理を基調にすえてのみ解決できるのだというのが、私たちの基本的な立場です。

なぜ、倫理をもってすれば解決し得るかといえば、倫理はおよそすべての人類に共通する唯一の規準であるからです。真のグローバルスタンダード、それが倫理なのです。

数多くの海外取材をこなしてきたあるジャーナリストが私に教えてくれたのは、どんな秘境へ分け入

つても、人間の倫理観だけが変わらないということでした。どんなに貧しい国、どんなに過酷な状況にある地域でも、誠実や正直が尊ばれ、愛と平和が理想とされているというのです。倫理という地平においては、世界中の人間がまったく同じところに立脚しているのです。

倫理によって問題を解決するために、現実的に私たちがとり得る方策もまた、ただ一つ、「現実大肯定」です。お互いの利害得失も含めて、すべてをあるがままに認知する。そしてお互いの仕合わせのために、倫理を規準に妥協すべきは妥協し、譲るべきは譲る。これで解決できない問題は無いのです。

こう考える私にとって、カリー氏の言うところはまさに「朋あり遠方より来たる、また樂しからずや」でした。しかし、ちょっと寂しい気もいたします。遠い異国からやって来た学者だけが道を同じくする同志なのです。私どもの主張を聞いたさまざまな方たちが、「なるほどそうですね」「同感です」とおっしゃってくださいます。しかし、彼自身の信念として「倫理をグローバルスタンダードにしなければならぬ」ということをおっしゃった方はいないのです。この国では倫理は孤独であるのです。

およそ人が人である限り、その抱くところの倫理は同じだと、外国へ行った多くの人たちは感じているはずですが。しかし、それをこの国では声高に語ろうとはいたしません。なぜか倫理を語る事が恥ずかしいことと思われているらしいのです。もしそうであるとすれば、この社会はよほどに深く病んでいるのではないかと、私には思われてなりません。

しかし「論語」の「朋あり遠方より来たる」の最後は、「人知らずして懼らず、また君子ならずや」で締めくくられています。自分の努めるところが人に認められないからといって腹を立てたりはしない。それが君子というものだということです。その通りです。不足を言うのは心の無駄というものです。

「徳は孤ならず、必ず隣あり」と信じて、新たに大地に生き貫いてまいりましょう。